

『笈の小文』における西行の面影

橋 本 美 香

この論文では芭蕉の西行享受を知る手掛かりとして、『笈の小文』

に見える西行の面影を探っていきたい。

二

『笈の小文』の冒頭は次のように示されている。

しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。
 見る処花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ
 事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる
 時は鳥獸に類ス。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、
 造化にかへれとなり。

風雅は、狭い意味では俳諧のことをさすが、その背後には美的宮
 為全般が横たわるものである。(赤羽学先生『芭蕉と人』第二章
 一一〇頁)そして芭蕉が「四時を友とする」態度は、西行の歌に
 おいて見られる姿でもある。

なみのおとを心にかけてあかすかなとまゐる月のかげをとも
 にて

(山家集 四一四)

『笈の小文』において芭蕉は、古人について次のように記して
 いる。

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵にお
 ける、利休が茶における、其貫道する物は一なり。

ここに挙げられている古人のなかで、西行については、この他に
 も記載がある。

よしの、花に三日とまりて、曙、黄昏のけしきにむかひ、
 有明の月の哀なるさまなど、心にせまり胸にみちて、あるは
 棋童公のながめにうば、れ、西行の枝折にまよひ、(以下略)
 また、次の文も見られる。

跪はやぶれて西行にひとしく、天龍の渡しをおもひ、馬を
 かる時はいきまきし聖の事心にうかぶ。

このように『笈の小文』で芭蕉は、西行の和歌創作の態度、吉野
 における桜への憧憬、説話に現れる旅中の様子を取りあげている。

ふりうづむゆきをともにて春きては日をおくるべきみ山べの
さと
(山家集 五六八)

なにとなく春になりぬときく日より心にかかるみよしののや
ま
(山家集 一〇六二)

秋は月を友として眺め暮し、冬は雪を友としている。また春の歌では友と詠歌していないが、桜に心を寄せていることが歌われている。

そして芭蕉が、見る所が花であり、思う所が月であるとしている花月は、西行の作品の中で圧倒的に多く詠まれており、西行の代表的な詠歌の対象である。このことが窺える歌に次のものが見られる。

君はまづうき世の夢のさめぬとも思ひあはせむのちの春秋

(宮河歌合 七三)

春秋を君おもひいでば我は又花と月とにながめおこせん

(宮河歌合 七四)

これは『宮河歌合』の巻末に添えられた、判者である定家とそれに対する西行の返歌である。この歌において、西行が春には花、秋には月を「ながめおこせん」と詠歌していることから、花月を代表的な詠歌の対象としており、西行が花と月を重要視していたことが窺える。『宮河歌合』は、『御裳濯河歌合』とともに西行自身の手によって晩年に編纂されたものである。この両歌合は、文治三年（一一八七）西行が生涯にわたって詠じた歌の中から一

一四首を選び、正統二度の三十六番歌合を編纂し、伊勢神宮に奉納することを目的としたものである。その正編が『御裳濯河歌合』であり、続編が『宮河歌合』である。それぞれ藤原俊成、定家に加判を依頼^注している。また花月を重要視したことは森田章一郎氏が、両歌合において、全体の三分の二が四季歌^注で占められ、中でも花月を重点的に捉えていると指摘していることから言える。

芭蕉の見るものがすべて花であり、思う所がすべて月であるという態度に通うと思われる西行の歌を、花月を重点的に捉えている『御裳濯河歌合』・『宮河歌合』から用例を次に引く。花については左記の歌が見られる。

おしなべて花のさかりに成りにけり山のはごとにかかるしら

雲
(御裳濯河歌合 五)

花さきし鶴の林のそのかみをよしのの山の雲にみるかな

(御裳濯河歌合 六三)

雲にまがふ花のさかりをおもはせてかつがつさむみよしの
の山
(宮河歌合 九)

よし野山ふもとにふらぬ雪ならば花かとみてや尋ねいらまし

(宮河歌合 四九)

西行は白雲、雪、霞を見て桜の花を想起している。そして、芭蕉が「おもふ所月にあらずといふ事なし」という月も、西行が心に思い描いて止まないものである。

秋になれば雲井のかげのさかゆるは月のかつらに枝やさすら
ん
(御裳濯河歌合 八)

こむ世には心のうちにあらはさむあかでやみぬる月のひかり
を
(御裳濯河歌合 一四)

月の色に心をふかくそめましや宮こを出でぬわが身なりせば
(宮河歌合 二七)

さらに

ねがはくは花のもとにて春しなむその二月のもち月のころ

(御裳濯河歌合 一三)

と歌い、最期を思い描いても、西行は花と月を望むのである。

三

貞享四年十月に旅に出立するにあたって芭蕉は、

神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地し
て

と記している。これは『古今和歌集』の次の歌を典拠^註としている。

秋風にあへずちりぬるもみちばのゆくへさだめ我ぞかなし
き
(古今和歌集 秋下二八六よみ人しらず)

また『十六夜日記』も典拠^註としている。

比は三冬たつはじめの空なれば、降りみ降らずみ時雨もたえず、嵐に競ふ木の葉さへ涙とともに乱れ散りつつ、事にあふれて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、行き憂しとて

もとどまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。

(『十六夜日記』)

阿仏尼は、初冬の旅立ちに際して、木の葉を涙と共に乱れ散るものとして捉え、心細さを表現している。『十六夜日記』を約一世紀遡る西行の歌にも、わが身の不定な様が木の葉に寄せて詠じられている。

かぜわづらひて山でらにかへりけるに、人人とぶらひて、よろしくなりなばまたとくと申し侍りけるに、おのおの心ざしをおもひて

あだにちるこのはにつけておもふかなかせさそふめる露の命を
(山家集 九二六)

秋、とほく修行し侍りけるに、ほどへけるところより、侍従大納言成通のもとへ申送りける

あらし吹くみねのこのはにともなひていづちうかる心なるらん
(山家集 一〇八二)

特に二首目において、秋に修行に向かうときの心境が歌われている。これに対して、芭蕉も初冬の旅立ちに際し、「身は風葉の行末なき心地して」と記しており、西行の歌と旅立つ季節も類似している。また芭蕉の文に見られる「風葉」と、西行の歌の「あらし」・「このは」も類似している。

ここで「風」・「あらし」の語が見られるが、風は西行の入滅から五年後に編纂され、西行の歌を入集歌数第一位とする『新古

今集』に多く詠まれている素材である。風は無常観の表現としてふさわしいものであり、実態のない風が、隠者の心のあり方と深いところで通い合うものである。(シンボジウム日本の文学6『中世の隠者文学』)そして、西行には、全歌数二〇九〇首中、約二二〇首の風の歌が見られ、素材の中でも屈指の多さであることが稲田利徳氏^{註五}によって指摘されている。

このような詠歌対象である風を、西行が修行の立出に際して詠出した歌に、次に挙げるものも見られる。

あづまのかたへ修行し侍りけるに、ふじの山をよめる

風になびく富士の煙の空にきえてゆくへも知らぬ我が心かな

(新古今集 雑中一六一五)

この歌は、慈円が西行の入滅時に、寂蓮のもとに送った歌の跋文にも記載が見られる。

君しるやそのきさらぎといひおきてことばにおへる人の後の

世 (拾玉集 五一五八)

風になびくふじのけぶりにたぐひにし人の行へは空にしられ

て (同 五一五九)

ちはやぶる神にたむくるもしほ草かきあつめつつみるぞなし
き (同 五一六〇)

これは、ねがはくは花の下にてわれしなんそのきさらぎの
もち月のころ、とよみおきて其にたがはぬ事を世にもあは
れがりけり、又、風になびくふじのけぶりの空にきえて行

へもしらぬわが思ひかな、もこの二三年の程によみたり、

これぞわが第一の自嘆歌と申しし事を思ふなるべし、

「風になびく…」の歌を西行は入滅前の二、三年間と最晩年に詠出し、この歌を「わが第一の自嘆歌」としている。「自嘆歌」は自讃歌と同じ意味であり、この歌を西行が生涯の中で第一の代表作としたことが知られる資料である。この歌において西行の思いは、煙と同一視され、煙と共に風に吹かれて消え行くものと詠歌されている。このように、自然界に融合する歌を西行が「わが第一の自嘆歌」としたことから、西行の最も好んだ歌のスタイルが自然との融合であると言える。

この他に自然との融合をはかった歌に、次に挙げるものが見られる。

世にあらじと思ひたちけるころ、東山にて、人人、寄霞

述懐と云ふ事をよめる

そらになる心は春のかすみにてよにあらじともおもひたつか

な (山家集 七二三)

西行の出家は保延六年(一一四〇)、二十三歳の時である。「世にあらじと思ひたちけるころ」と詞書にあり、この作品は出家以前の歌である。このことから初期の作品において、すでに自然と自己の融合を試みていたことが窺える。また西行の好んだ素材である花月を詠歌する時も融合をはかっている。

世の中を思へばなべてちる花のわが身をさてもいかさまにせ

ん

(宮河歌合 一七)

世の中のうきをもしらですむ月の影はわが身の心ちこそすれ

(宮河歌合 二九)

そして芭蕉は「身は風葉の行末なき心地して」と我が身を行方の知らないものと捉えている。西行が行方のわからないと捉えているものに、次に示す歌が見られる。

ゆくへなく月に心のすみすみてはてはいかにかならんとすら

ん

(山家集 三三二)

ちる花もねにかへりてぞ又はさくおいこそはてはゆくへしら

れね

(聞書集 九九)

芭蕉の「神無月の初、空定めなき…」の文には、「古今集」「十六夜日記」に見られる、風に誘われる木の葉と我が身の融合の形が認められる。西行の歌において西行自身は、霞となって俗世を思い断ち、煙、木の葉となって自然の中に融合し、行方知れずになる。このことから、芭蕉の「神無月の初、空定めなき…」の文において、西行の面影を見ることができるといえる。またここに挙げた西行の歌と、先に述べた「造化にしたがひ、造化にかへれとなり。」と芭蕉が述べることは、自然に帰一する点で一致しており、ここにも西行の歌の面影が見られるといえる。

四

『笈の小文』において、伊勢の条でも西行の面影を見ることがで

きる。

何の木の花とはしらず匂ひ哉

これは『西行法師家集』の版本のみに入集する

何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる

を踏んでいる。このことは芭蕉の俳文によって知ることができる。

貞享五とせ如月の末、伊勢に詣ず。此御前のつちを踏事、今五度に及び侍りぬ。更にとしのひとつも老行まゝに、かしこきおほんひかりも、たふとさも、猶思ひまされる心地して、彼西行の「かたじけなさに」とよミけん涙の跡もなつかしければ、屬うちしき、砂にかしらかたぶけながら

武陵 芭蕉桃笥 拝

何の木の花とはしらず匂ひ哉

再案

何の木の花ともしらぬ匂ひ哉

(花はさくら)

この俳文によって、『笈の小文』にある「何の木の花とはしらず匂ひ哉」は初案であることも窺える。伊勢神宮は、西行が生涯にわたって何度も訪れ、庵を結んだ地であり、歌合を奉納した所でもある。そして実際に『御裳濯河歌合』には伊勢を詠じた歌が取られている。

岩戸あけし天つみことのそのかみに桜をたれかうゑはじめけむ

(御裳濯河歌合 一)

神路山月さやかなるちかひありて天の下をばてらすなりけり

(同 二)

神風に心やすくぞまかせつる桜の宮の花のさかりを

(同 三)

さやかなるわしのたかねの雲より影やはらぐる月よみの杜

(同 四)

深く入りて神路のおくをたづぬれば又うへもなき峰の松かせ

(同 七二)

流たえぬ波にや世をば治むらん神かせすずしみもすその岸

(同 七二)

【御裳濯河歌合】一番歌は、『西行法師家集』六〇五番において、

「みもすそ川のほとりにて」の詞書を持つ。また、四番歌は六家

集本を底本とする『西行全集』二一一六番によると「内宮にもう

で侍りけるに、桜の宮を見て詠み侍りける」の詞書を持つので、

これらの歌は実際に伊勢を詠み込んでいないが、伊勢を詠じてい

るといえる。『宮河歌合』において西行は、伊勢の詠を入集させ

ていない。しかし、『御裳濯河歌合』では一番左・右、二番左・

右、卷末三十六番左・右に伊勢を詠じた歌が取られている。伊勢

の詠ではじまり、伊勢の詠で終わっているのである。

これに対して伊勢神宮において芭蕉は次の句を吟じている。

涅槃会

神垣やおもひもかけずねはんぞう

涅槃会は、二月十五日の釈迦の入滅の日に取り行われる追悼報恩の法会のことである。この句にも芭蕉の俳文が存在する。

十五日、下宮の館にありて

神垣やおもひもかけずねはん像

〔伊勢懷紙〕〔蕉翁全伝附録〕

この句は、二月十五日に伊勢の外宮において涅槃会を詠んでいるものである。また西行も伊勢神宮において、神と仏を詠歌している。

伊勢にまかりたりけるに、大神宮にまゐりてよみける

さか木ばに心をかけんゆふしでのおもへば神もほとけなりけ

り
〔西行法師家集 六〇三〕

また、西行の最期を願った歌である、

ねがはくは花のもとにて春しなむその二月のもち月のころ

において、二月十五日を詠み込んでいる。そして実際に西行の入滅は建久元年（一一九〇）二月十六日であり、涅槃会の日後である。

〔御裳濯河歌合 一三三〕

先に挙げた「何の木の子」の俳文の中で芭蕉は、貞享四年から

五年にかけての「笈の小文」の旅において、伊勢訪問が五度目であるとしている。それ以前の芭蕉の伊勢訪問の句吟に、

みそか月なし千とせの杉を抱くあらし

（野ざらし紀行）

が見られる。この句は貞享元年八月みそか（二十九日）に伊勢神

宮に参拝した時の句吟である。月のない「みそか」に月の語を入れたのは、月を愛でた西行にあやかるためである。そして、この句は実際に次の歌によるものである。

深く入りて神路のおくをたづねれば又うへもなき峰の松かぜ

(御裳濯河歌合 七二)

この歌は、「心詞深くして愚感難抑」と俊成が判をしている。そして窪田章一郎氏は「本地垂跡の信仰心を自然形象化する表現力を、俊成は優れたものとして賞美^{ほめ}している。」と述べている。またこの歌は『西行法師家集』六二六番において、次の詞書を持つ。

高野山をすみうかれてのち、伊勢国二見浦の山寺に侍りけるに、大神宮の御山をば神千山と申す、大日の垂跡をおもひて、よみ侍りける

このことから本地垂跡を詠んでいることがわかる。

芭蕉が典拠とした「深く入りて…」の歌は、西行の仏道修行の深まりを知ることのできる歌でもある。したがって、芭蕉が伊勢で仏教の行事である涅槃会の句を詠むことは、西行の歌に見られる本地垂跡の影響があるものであると考えられる。そして、芭蕉にとつての伊勢の地は、西行の歌と密接に関係しており、『笈の小文』においては、西行の歌の中でも伊勢の詠が取られている。『御裳濯河歌合』の影響が色濃く見られると思われる。

五

四で挙げた「神垣や…」の歌に続く、次の条の冒頭部分にも、西行の面影が見られる。

弥生半過る程、そゝろにうき立心の花の、我を追引枝折となりて、よしの、花におもひ立たんとするに、

この中で「そゝろにうき立心の花の」は、西行の次の歌と関連があると思われる。

何となく春になりぬと聞く日より心にかかるみよしの山

(西行法師家集 七四)

おほつかな花は心の春にのみいづれのとしかうかれそめけん

(山家集 一四九)

このように西行は、春になると花を心に思い描き、吉野の山に心はうかれていく。そして「我を追引枝折となりて、よしの、花におもひ立たんとするに」は、「よしの山こそしのしをりの道かへてまだみぬかたの花をたづねん(御裳濯河歌合一七)」による。また、霞によって隔てられた吉野の桜へ、雲を追標としてむかう態度は、西行の次の歌に見られる。

おもひやる心やはなにゆかざらんかすみこめたるみよしののやま

(山家集 六一)

よしの山くもをはかりにたづねいりて心にかけて花をみるかな

(山家集 六一)

『笈の小文』は「神垣や…」の句から、直接三月に吉野へ向かうことへ展開している。しかし実際には、貞享五年二月中旬の杉風宛書簡によると、伊勢訪問後二月十八日に伊賀上野に帰郷し、その後三月中旬に吉野にむけて伊賀上野を出発しているとされている。『笈の小文』の中で「神垣や…」の句から吉野にむかう文への展開は、西行が生涯にわたって何度も訪れ、庵を結んだ地である伊勢から吉野へと、西行にゆかりのある土地を結んでいると思われる。

また吉野は西行によって桜の名所として定着したが、古代から山岳修行の拠点とされた所でもある。そして、吉野・大峰・熊野を合わせた三山は、修験霊場でもある。西行以前にこの地で修行した僧に行尊がいるが、西行の大峰での修行は、この行尊を慕ったことであると宮家準氏によって指摘されている。大峰での行尊の歌に、次のものが見られる。

大峰にておもひもかけずさくらの花を見てよめる

もろともにあはれとおもへ山ざくらはなよりほかにしる人も

なき
(金葉集 雑上五二一僧正行尊)

西行には、この歌をもとにして詠んでいると思われる歌が見られる。

もろともにわれをもぐしてちりね花うきよをいとふ心ある身

ぞ
(山家集 一一八)

そして芭蕉も『奥の細道』の月山登山において、行尊の「もろと

もに…」の歌を心に思い描いている。

岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる桜のつばみ半ばひらけるあり。ふり積む雪の下に埋もれて、春を忘れぬ選ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかはるがごとし。行尊僧正の歌の哀れも爰に思ひ出でて、猶まさりて覚ゆ。月山において六月に見た桜の花を、「行尊僧正の歌の哀れも爰に思ひ出でて」としているが、この行尊の歌は先に挙げた「もろとも…」の歌である。また、芭蕉の月山登山は、行尊の大峰入りをもとにしているものである。

実際に芭蕉は吉野に三日滞在し、西行が

身をわけて見ぬこずみなくつくさばやよろづのやまの花のさかりを
(山家集 七四)

と歌った桜の花をみて、「曙、黄昏のけしきにむかひ、有明の月の哀なるさまなど心にせまり、胸にみちて」と記している。また西行は

あはれわがおほくの春の花をみてそめおく心誰にゆづらん

(西行法師家集 四八)

と詠歌している。芭蕉は、この西行が「誰にゆづらん」といった花に染めおく心を譲り受けようとしたのではないだろうか。このように吉野は芭蕉にとって、西行の愛でた桜の花を慕う場所であると同時に、西行の先人でもある行尊の面影を見ることが出来る場所であるといえる。

六

芭蕉には和歌浦において次の句がある。

行春にわかぬ浦にて追付たり

(笈の小文)

和歌浦は、『御裳濯河歌合』の巻末に挿入されている俊成と西行の贈答歌の中にも見られる。

契りおきし契のうへにそへおかん和歌のうら踏のあまのもし
は木

(御裳濯河歌合 七四)

和歌の浦にしほ木かさぬる契をば玉ものすその跡にてぞみる

(御裳濯河歌合 七六)

実際には紀三井寺において「見あぐればさくらしまふて紀三井寺」(菊苗集)の句を吟じているとされているが、『笈の小文』では「和歌浦」の句に続き、「きみ井寺」の地名だけが挙げられ、次の条に移る。そして次の条の冒頭は、

蹠はやぶれて西行にひとしく、天龍の渡しをおもひ、馬をかける時はいきまきし聖の事心にかぶ。

と、『西行物語』にある天龍川の渡船場の事件が示されている。前の条の最後に挙げられている句は、西行の面影のあると思われる和歌浦が詠まれ、これに続き次の条は西行の事件から始めている。このことから、『笈の小文』において新しい条へと展開する時、西行の面影を見ることができると言える。

『笈の小文』は未完成な形であり、句集の性格の「野ざらし紀

行」から句文融合の世界を持つ『奥の細道』への過渡的性格とされている。(弥吉管一・赤羽学他『笈の小文・更科紀行―芭蕉紀行―』)したがって西行の歌の面影をはじめとして、古典の世界を芭蕉がより深く享受した姿は、『奥の細道』の冒頭に現れていると考えられる。

予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず。海辺にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白川の関をこえんと、そぞろ神の物につきてこゝろをくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取ものも手につかず。

片雲の風に誘われ、漂泊の思いがやまないことは、『笈の小文』との関係で述べた西行が風によって心を誘われ、修行へと出かける態度と類似している。「春立てる霞の空に白川の関をこえん」とすることは、西行が出家を思いたった頃の歌において、霞とともに俗世を逃れようとしたことを想起させるものである。また「物につきてこゝろをくるはせ」ていることは、「造化にしたがひて四時を友とす」・「造化にしたがひ、造化にかへれとなり」と、直接的には『列子』をもとにしている自然への帰一を、西行の歌を媒介として、芭蕉が自然な形で表現することができたものであると考えられるのではないだろうか。

注

注一、『和歌大辞典』

注二、『西行の研究』第四編序章二、四二九頁

注三、岩波日本古典文学大系『芭蕉文集』五二頁

注四、廣田二郎著『芭蕉と古典』第四章六節、一二二頁、本文は、梁瀬一雄、武井和人著『十六夜日記、夜の和注歌』による。

注五、『西行の風の歌』『中世文学研究』第三号

注六、蝸牛俳句文庫9『松尾芭蕉』二五頁

注七、同二、第五編三章二、六九八頁

注八、同四、第一章、二四八頁

注九、片桐洋一編『歌枕歌ことば辞典』

注十、『修験道の研究』第四章三、二七〇頁

注十一、赤羽学先生『芭蕉と人』第四章、二〇三頁

※『笈の小文』および『奥の細道』は『校本芭蕉全集 第六巻紀行・日記篇 俳文篇』による。また歌番号は『新編国歌大観』による。

(平成五年岡山大学大学院修了)

研究室受贈図書雑誌目録(九)

富士論叢(富士短期大学文学部研究会) 第37巻第1号

佛教大学文学部論集 第77号

文学研究(聖徳大学短期大学部国語国文学会) 第八号

文学史研究(大阪市立大学国語国文学研究室) 33

文学論叢(九州大学教養部文学科) 第38号

文学論叢(東洋大学文学部国文学研究室) 第六十七号

文教国文(広島文教女子大学国文学会) 第28号、第29号

文研論集(専修大学大学院) 21、22

文藝研究(東北大学日本文学研究会) 第132集、第133集、第134集

文藝と思想(福岡女子大学文学部) 第57号

文芸と批評(文芸と批評の会) 第七巻第七号

文藝論叢(大谷大学文芸学会) 第39号、第40号

文藝論叢(文教大学女子短期大学部文芸科) 29

文葉(鈴木服学会) 第十八号

文林(松蔭女子学院大学国文学研究室) 第27号

三田國文(三田國文の会) 第十六号、第十七号、第十八号

武庫川國文(武庫川女子大学国文学会) 第四十号、第四十一号

目白学園国語国文学(目白学園女子短期大学国語国文科研究室) 第2号

野州國文學(国学院大学栃木短期大学国文学会) 第五十一号

山口国文(山口大学人文学部国語国文学会) 第16号

山邊道(天理大学国語国文学会) 第三十七号

論究(論究社) 第37号、第38号

論究日本文学(立命館大学日本文学会) 第57号、第58号